博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　中谷　純江　印

学位申請者　Bruno Asiimwe

論　文　名 Ethnic Identity and the Disarmament, Demobilization and Reintegration Process in the Contemporary Northeastern Democratic Republic of the Congo

＜審査結果＞

審査委員会は、主査に中谷純江（国際関係論）、副査として、間寧（比較政治学）、武内進一（アフリカ政治）、佐藤千鶴子（アフリカ政治）、篠田英朗（国際関係論）の 5 名によって構成され、それぞれ専門の見地から論文を精査し、内容を詳細に検討した上で、2026 年 9 月 16 日に公開の最終審査を行った。その後、論文および最終試験の内容について協議を行った結果、本論文は、本学大学院が学位授与のために定めた基準を十分に満たしており、優れた高い学術性を有していることが確認された。よって審査委員会は全員一致で、Bruno Asiimwe 氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。

論文および審査の概要は以下の通りである。

＜論文概要＞

本論文は、コンゴ民主共和国北東部における民族アイデンティティ紛争と、「コンゴ開発協同組合（CODECO）」や「ザイール（Zaïre）」など、特定民族を基盤として構成員を募る武装集団の活動を分析したものである。とりわけ、ヘマ人とレンドゥ人の間で見られる民族的な動員が、武装解除・動員解除・社会復帰（DDR）をいかに阻害しているかを、1996 年から 2025 年までの紛争史および MONUC／MONUSCO の活動を踏まえて検討した。民族に基づく徴募、武装集団内部の民族間緊張や帰属の変化、元戦闘員に対する差別、特定民族による支配、DDR への条件付き参加などが主な分析対象であった。調査では、2024 年の乾季にイトゥリ州で現地調査を実施し、ディアンゴ収容施設の元戦闘員 21 人と、ブニアの主要情報提供者 6 人に半構造化インタビューを行ったほか、参与・非参与観察も用いた。そうした分析を通じて、本論文は、地域首長の態度と武装集団の民族志向的な指揮系統が相互に作用し、民族に基づく徴募を強化していると論じる。さらに、民族集団や武装組織の分裂が共同体の断片化、民族的不寛容、敵意、暴力を深刻化させ、元戦闘員の包括的な社会復帰を妨げ、DDR プロセスを停滞させる主要因になっていると結論づける。

本論文は、序論、結論を含めて、7 つの章からなっている。

本論文の序章は、論文の背景となっている状況や、論文が目指す議論の枠組みを、リサーチ・クエスチョンとともに提示する。どのように民族アイデンティティを基盤とした徴兵と武装組織の命令系統がコンゴ民主共和国の DDR を阻害したのか、という問いを提示する。そして民族的分断による共同体の分裂が DDR を阻害した様相を明らかにするための本論文の構成を示す。

第 2 章は、アフガニスタンなどの事例を通じ、民族的分断が DDR に及ぼす影響を先行研究から検討する。DDR という介入を、「成功」または「効果なし」のいずれかに分類することは困難であることが示される。同時に、信頼醸成措置が、DDR プロセスの失敗を回避するための重要な要素であることも指摘される。

第 3 章は、MONUC／MONUSCO に注目し、コンゴ民主共和国における民族紛争と DDR の歴史をたどる。和平合意への当事者の関与不足や武装集団の分裂・再編が DDR を阻害する一方、MONUSCO は多数の元戦闘員の帰還・社会復帰を支援してきた。民族、領土、権威をめぐる対立と社会的排除が共同体を分断し、民族アイデンティティに基づく動員と徴募を促進することが、DDR の成果を限定する要因だと論じる。

第 4 章は、コンゴ民主共和国北東部の民族武装集団による徴募を分析し、ヘマとレンドゥの民族意識を操作する徴募が共同体の分断と敵対を深め、DDR を停滞させていると論じる。指導者の私益の追求、武装集団の分裂、国内外からの武器流入も、暴力を持続させる。元戦闘員は過去の残虐行為から家族や共同体に拒絶され、収容生活への疲弊と帰属喪失により再入隊する傾向があり、社会復帰と集団的武装解除を一層困難にしている。

第 5 章は、イトゥリ州の地域首長の態度が、民族武装集団の活動と徴募を正当化・支援し、DDR を阻害する過程を分析する。元戦闘員は過去の残虐行為により民族差別や家族からの拒絶を経験し、共同体への復帰が困難になっている。聞き取り調査を通じ、民族的不寛容、エリートによる紛争操作、非公式経済や土地を利用した戦費調達を検討し、地域首長と武装集団の指揮構造が相互に依存して共同体の分断を深めていることを示す。

第 6 章は、CODECO やザイールの民族的指揮構造が、歴代 DDR と現在の P-DDRCS における徴募・統合を阻害する過程を分析する。地域首長の権威や社会的ネットワークと武装集団の指揮系統は相互に強化され、集団的武装解除を妨げている。MONUSCO の地域暴力削減事業、和平妨害者、住民への啓発、地域主体の社会復帰策を検討し、政府による元戦闘員の予備役編入が暫定措置にとどまる実態を示す。

最終章は、レンドゥとヘマの民族アイデンティティの操作が、共同体と武装集団の分裂を招き、DDR を阻害したと結論づける。地域首長は住民を動員して新たな分派を形成し、民族間の敵意を深めた。CODECO やザイールは集団的武装解除を拒み、条件付きの個別参加を選ぶため、元戦闘員の社会復帰と民族集団の結束が損なわれ、イトゥリ州の DDR は停滞している。

＜審査概要および評価＞

本論文で評価すべきは、コンゴ民主共和国における民族的アイデンティティに由来する社会動向が、国連主導の DDR のプロセスに、どのような連動性を持っていたのかを、詳細な現地聞き取り調査をふまえて、論じた点にある。聞き取り調査は、複数の武装集団の元戦闘員と DDR の実施主体に対して丹念に行われ、その記録は附属資料としても添付しており、資料提供の価値を持つ。本論文の研究によって、民族的アイデンティティを基盤にした武装集団が、DDR のプロセスを複雑化させる事情が、より一層明らかになったと言える。

ただし本論文の理論的枠組みは必ずしも明晰ではなく、本論文の達成したことを、理論的な観点から評価することは必ずしも容易ではない。また、民族アイデンティティ以外の要素を扱うことができなかったため、長期にわたる武力紛争と DDR のプロセスの展開を詳細に説明していくべきところにも不足感が残った。

もっともコンゴ民主共和国東部地域の長期にわたる武力紛争とその背景にある複雑な政治的・社会的背景をかんがみると、簡単には全容を解明することができない問題群があると言わざるを得ないのは確かである。達成したことには明白な限界があることについては、学位申請者にもよく意識されており、論文においても配慮がなされていた。審査における質疑応答でも、真摯な対応が見られた。指摘された本論文の限界は、本論文が達成したことを無にするものではないという評価では、審査員の意見は一致した。

最終試験は 9 月 16 日（水）の 12 時半から 14 時まで 1 時間半にわたり、対面で、公開で行なわれた。審査委員から提起された問題点等に対しては、学位申請者から真摯で的確に応答がなされた。審査委員から論文の内容に関して提起された質問は、論文の独自性はよく説明されているか、先行研究をふまえたうえでの問題設定になっているか、問いの立て方は適切だったか、独立変数と従属変数の設定は妥当だったか、共同体の分裂が DDR を阻害していく過程の説明は十分だと言えるか、北キヴ州とイトゥリ州を対象にした分析の配分は適切だったか、紛争と DDR の時系列的な展開の説明に整理が必要だったのではないか、民族アイデンティティと徴募の関係の説明は論理的に行われていると言えるか、あるいは共同体首長に対する調査の不足は適切に補われていると言えるか、など論文の議論の展開や概念構成に関するものを中心にしたものであった。学位申請者は、いずれに対しても、論文が達成した範囲内で、妥当な回答を提示した。これを受けて、審査委員会は、論文が、本学大学院が博士学位授与基準としている①研究テーマの妥当性、②問題意識の明確さ、③方法論的一貫性、④先行研究との関係、⑤論旨展開と文章表現の妥当性を十分に満たす学術性を持っていることを確認した。よって Bruno Asiimwe 氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。